連載講座 第22回

災対本部での席順・酒井忠勝

作家　童門冬二

いまは次第にそんなことを気にするおエラいさんは少なくなったと思うが、むかしは会議における「席順」がやかましかった。また、それを気にするおエラいさんがたくさんいた。公的な会議でもそうだが、夜の懇親会などでもいちばん上席に座って、いわゆる“床柱を背にする”という席でないと承知しない人がいた。

江戸時代初期の幕府老中酒井忠勝はそういう人物だった。なにしろ家が徳川家の功臣であり名門なので、まわりが常にそういう持ち上げ方をしていた。そのため忠勝もそれが当たり前だと思っていた。ところが三代目の将軍家光の時代になって、ある日かれともうひとりの功臣土井利勝が、家光から、

「これからは、身体の調子のいい日だけ城へ上がれ。ほかの日はゆっくりせよ」

と命ぜられた。同時に老中から大老という名誉職に格上げされた。しかし忠勝は、

（これは上様（家光）の敬遠人事だ）

と思った。つまりランクアップして、肝心な中枢機能から遠ざけようという腹だ、と家光の人事方針を見抜いたのである。事実、そのとおりだった。家光は自分なりの政策を手早くおこなうためには、やはり忠勝のような老臣は邪魔になる。考え方が古い。そのため家光が頼りにしている松平信綱などの新興官僚の出場がなかなか得られない。家光が忠勝と土井に一見温情主義のような方針を示したのは、そのために打った手である。忠勝は江戸城の廊下を渡りながら同僚の土井利勝にしみじみといった。

「もうわれわれはご用済みということだな」利勝もうなずく。「わたしもそう思います。最早、われわれの世の中ではない。松平のような若手がどんどん伸びる時代だ」「しかし、かれらは合戦経験がまったくない。幕府は武家の政権だ。いつなにが起こるかわからない。机に向かっているだけでは政務はおこなえない」

未練がましく忠勝はそんなことをいった。明暦三（一六五七）年の一月に江戸に大火が起きた。いわゆる“振袖火事”と呼ばれる大火災である。江戸の町がかなり消防した。その日忠勝は自邸にいた。庭の植木をいじっていると、目付の武士がとびこんできた。

「酒井様、江戸に大火災が起きました。直ちに、対策会議を開きますのでぜひおいでをいただきたいと存じます」忠勝は眼をあげた。

「おまえにいってもしかたがないが、わしはすでに閑役だ。対策会議に出てもなんの役にも立つまい」「いえ、これは老中松平信綱様からのお達しでございます。ぜひお願いいたします」「老中の松平？」忠勝はきき咎めた。

「この間まで、老中格だった松平がもう老中に出世したのか。いまはもうそういうご時世なのだな。それでは新老中松平殿に、いまわしがいったこと

を伝えてくれ。伺ってもお役に立てないとな」
「そんなことをおっしゃらないでぜひおいでください。松平様は、酒井様と土井様がおいでにならなければ対策が立てられないと、申されております」
「うまいことをいうな、おまえは。相当松平に飼いならされているな」忠勝はそうからかった。しかし松平が「酒井様と土井様がおいでにならなければ、対策が立てられない」といっているということをきいて少し気分をよくした。そこで目付の武士に「わかった。少し立ったら城へ登る」といった。すると目付は大きく首を横に振った。こういった。
「対策会議は、江戸城ではございません」「どこだ？」「火災現場に近い、こういう場所でございます」と目付は、ある大名の屋敷を告げた。忠勝はまた不機嫌になった。「だれの知恵だ？　対策会議は江戸城内で開くことに決まっておる。市中に出るなどという先例はない」
「でも、それはご老中の松平様が」「おまえはいちいち松平、松平、とあいつの名を出す。どうも気に食わぬ」
「ぜひ、おいでをいただきます。よろしくお願いいたします」
　目付は逃げるように去っていった。気に食わなかったが忠勝は出かける準備をした。腹の中では（松平のやつはさすがだ）と思っていた。江戸市中が焼けているのに、城内の机の前に座って対策会議を開いてもしかたがない。なんといっても現場から次々と入る情報を受けとめるためには、現場に近いところに対策会議の場所を設ける必要がある。忌々しかった。しかし目付が告げた場所へ利勝は出かけていった。かなり時間を取っておもむいた。現場は大変な混乱だった。次々と駆けつける大名たちを、入口に立った松平信綱がピタリピタリと的確に処理していた。いちばん厄介なのがどこに座らせるかだったが松平は、「到着順にお座り願いたい」と指示していた。そのために、本来なら酒井や土井が座るべきいちばん高い座も、すでに新参の大名たちによって占められていた。ようやく場所に着いた忠勝はこの状況をみて眉をひそめた。たちまち気分が悪くなった。かれが座るべきいちばん上席はすでに若い大名が座っていたからである。入口にいた松平に「松平、わしは帰る」といった。「なぜですか？」おどろいた松平はきき返す。酒井は黙って顎で上席を示した。気がついた若い大名がたちまち真っ青になった。こっちをみて、もじもじしている。忠勝はその大名を睨みつけた。そして松平に告げた。「わしの席がない」
「は？」
　一瞬、怯んだ松平はすぐニコリと笑った。そして「酒井様のお席はございますよ」「どこだ？」「ここでございます」松平が示したのは、入口に近い末席である。酒井は眼を光らせた。「松平、冗談をいっているのではあるまいな。わしの席はどんな場所でも最上席に決まっておる。ましていまは老中より格の高い大老だ。その上席には、すでにあの若い大名が座っているではないか」しかし松平は怯まずにこう説明した。「江戸城内でおこなう通常の会議でございましたら、そのとおりでございます。しかしいまは大火災のための非常のときでございます。したがって、この対策会議では先着順に席を詰めさせました。そのため空いているのはここだけでございます」「気に入らぬ。帰る」「酒井様」
　信綱が真面目な表情でいった。「われわれは、いつどんなときにもいつどんな場所でも、酒井様がお座りになる席が、その場所での最上席だと心得ております。どうぞ」有無をいわせないような口ぶりだった。酒井は信綱を睨み据えた。が、しだいにその尖った眼が和らいできた。松平信綱は“知恵伊豆”と呼ばれる人物だ。才知に溢れている。いまの言葉が忠勝の胸に刺さった。「どんな場所でも、あなたのお座りになる席がその場所での最上席なのです」というのはなんというトンチ

に富んだ言葉だろう。忠勝も（これ以上突っ張っては、わしの面目が廃る）と気づいた。そこで「わかった、ここに座ろう」と信綱のいわれた席に座った。城内の大名が全員ホッとする空気が忠勝にも伝わってきた。忠勝はしみじみと（もはや、わしたちの時代ではない。たしかに松平のような若手の時代なのだ）ということを改めて感じ取った。以後、酒井はどんな場所にいっても席順のことについていっさい文句をいわなくなったという。